沼

佐武　辰之佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
沼

【Ｎコード】
Ｎ０２２５Ｉ

【作者名】
佐武　辰之佑

【あらすじ】
連休の朝に目覚めた主人公。４連休はひとりでドライブに行くことに決める。小さな公園の向こうに沼を見つける。

僕はまどろんだ意識の中で夢を見ていた。これが夢であるということは自分でわかっているのだが、なかなか目を覚ませない。夢の中の僕は真っ暗な闇の中にいてさらに暗い闇の中に進もうとしているのがわかる。体中をびっしりと嫌な油汗をかいているのをぼんやりとした現実の僕が感じているのがわかる。僕は夢の中の自分に向かって「そっちは駄目だ、行ってはいけない」と全身系を振り絞って意識を覚醒させようとした。その暗闇に呑み込まれたら二度と戻ってくることはできないとわかっているからだ。しかし夢の中の僕は何も知らない無邪気な子供のようにふらふらと近づいてゆく。もう駄目だ、と諦めたところにようやく目が覚めた。

口の中が粘ついてひどい気分だったけど、落ち着くために煙草に手を伸ばした。こうゆう夢を年に何度か見ることがある。目が覚めた後も夢の中の恐怖心が頭から離れず、何日かうまく眠れなくなる。僕はシャワーを浴びて嫌な汗と気分を洗い流した。時計をみるともう昼近くを指している。簡単に食事を作りそれを食べながらこれからの予定を考えてみた。今日から連休の始まり。毎日毎日働いてばかりでゆっくりした時間をすごせるのはかなり久しぶりのことだった。週に一度の休みではできることは限られていて洗濯や買い物、掃除などをするとすぐに終わってしまう。何をするにしても落ち着いて物事に取り組む時間なんてない。でも今回の連休は４日間あった。僕はあえて予定は入れずに空けておいた。気が向けば旅行に行こうと思っていたからだ。たった４日の旅行なんてたかが知れているかもしれないが、ないよりはずいぶんましだ。しかしいろいろと考えてみたけれどこれといってとくに行きたい場所は思いつかなかった。連休に観光地なんて行ってしまうと予約でいっぱいだろうし、料金は高いし、人は多いし、そんなところでゆっくりできるとは思えない。そう考えると家にいてくつろいでいたほうがいいんじゃな

いかと思い始めたけど、この機会を逃すと今度いつ旅行に行けるかわからなかったため、やっぱり出かけることにした。だいたい目的地なんて決めようとするからいけないんだ、と思った。目的地を決めてしまうと「必ずそこにいかなくちゃいけない」という必然性みたいなものを抱いてしまって、そこへ着くまでは落ち着かないし、いざ着いてみても疲れてあまり楽しめないこともある。

迷ったあげく、結局どこに行くのか決めずに出かけることにした。着替えと日用品、財布、CD、カメラ、テント、寝袋、ウイスキー、地図、読みかけの本、そういったこまごましたものを車に積み込んだ。持って行き忘れがないか家に戻って確認していたところ、携帯電話が目に付いた。僕は携帯電話を持っていこうかどうかしばらく考えてみた。僕ははっきり言って僕は携帯電話というものが好きではない。時と場所を選ばず、あたりかまわずに鳴り出すし、その場の雰囲気を台無しにすることも少なからずある。かといって電話に出ないでいると

「なんで電話出ないんだ」とか

「ちゃんと電話持ってんのか」

なんて不機嫌になる人もいる。

僕が携帯電話を管理しているようで、実は携帯電話に管理されているんじゃないかと思うこともしばしばある。一見便利になった世の中だけど、僕にとってはより不便に感じられる。携帯電話や留守番電話なんてないほうがのびのびと暮らせるだろうなと思う。でも社会人として一つの組織に組み込まれている以上、それらを持たないわけにはいかないのだ。

「ひどい世の中だな」と思った。

携帯電話というものが世に広まったおかげでどこからが仕事でどこからがプライバシーなのかさえはっきりとわからなくなってしまった。さらにどんどん「便利な」世の中になっていけばいつ眠っていて、いつ起きているのかさえわからなくなってしまうかもしれない。ついには生きているのか死んでいるのかさえあやふやになってしま

うかもしれない。
「この装置を使えば、たとえあなたが動かなくっても仕事ができます」
というような物が発明されるかもしれない。そう考えると今のほうがまだましなのかもしれない、と思ったけどそんなこと誰にもわからない。そしてやっぱり携帯電話は持っていかないことに決めた。
「緊急の用事のときに」なんて言う場合もあったけど、思い返してみても本当に「緊急の用事」の電話があったことはここ数年で一度もかかってきたことはなかった。
　忘れ物がないことをもう一度確認して家の鍵を閉め、車のエンジンをかけた。そして煙草を吸ってエンジンが温まるのをしばらく待った。僕はこの「車で遠くに出かける前の雰囲気」というのがすごく好きだ。惰性に染まった、つまらない日常から抜け出して、今まで見たこともない、触れたこともない、新しい世界が僕を待っていてくれるような、冒険心に似たようなものにわくわくする。
ドライブ向きの軽快な音楽を選んでＣＤチェンジャーに突っ込んだ。そしてゆっくりと車を発進させた。家の近くの狭い路地をいくつか抜け、大通りが見えてきたところで、僕は迷った。ここを右に曲がれば山のほうに向かうし、左に曲がれば海の方に向かう。山・・・・・海・・・・。
車のスピードを落とし、しばらく考えていたが、後ろの車がクラクションを鳴らしたので反射的に右にウインカーを出した。
　大通りに出ると予想どおり道はひどく混んでいた。アクセルを踏んでいるより、ブレーキを踏んでいるほうが時間的に長い。走っているより、僕の前にいる車を眺めているほうが長い。ふざけた時間の使い方だと僕は思った。連休だから仕方がないのだが、どんどん合理的になってゆく世の中で、連休の渋滞だけは何十年経っても変わらない。これだけの車を停める為のスペースがどこかに存在するのだと思うと感心してしまう。すれちがう車を見ていると、誰しもが疲労を拭いきれず、何かに追い立てられ焦っているように見える。

みんな大変だな、と思った。働いて働いて、自分がどれくらい疲れているのかさえ正確にわからないまま、日常に追われ、たまの休みぐらい自分を取り戻そうとしているのに、うまくいかなくて焦ってくる。焦りが混乱を呼び、混乱がまた焦りを呼ぶ。

「ひどい世の中だな」ともう一度思った。

でも僕が何を思ったところで世の中の循環が良くなるわけではない。僕はもやもやした思いを振り払い、カーステレオのボリュームを少し大きくした。１０分ぐらい車は１ミリも動かず、どっしりと大地にへばりついていたけど、車の中で音楽を聴いているのはとても気持ちが良かった。近所の迷惑を考えてボリュームを絞ることはないし、大声で歌を歌っても誰にも嫌な顔をされることはない。リッラックス。そう、時に人間は頭を空っぽにしてリラックスすることが必要なのだと思う。

ごちゃごちゃした考えの中からはごちゃごちゃしたものしか生まれないし、ごちゃごちゃしたものは分かりにくい。相手にも伝わりにくい。時々頭を空っぽにして、考えを整理することが必要だと思う。シンプルなものほど理解しやすいし、わかりやすい。シンプル・イズ・ベストだ。

ひどい渋滞にうんざりしていたけど、何かの救いみたいに天気だけは良かった。青い空がどこまでも延々と広がり、新しい世界へと僕を導いてくれるような解放的な空気に満ち溢れていた。渋滞の生み出す重苦しい雰囲気を振り払うように歌を歌ったり、リズムに合わせてハンドルを叩いたり、首を振ったりして、一人の世界にどっぷりと漬かった。３時間ぐらいトロトロと走っているとようやく市街地を抜け、だんだんと車も流れるようになってきた。僕はコンビニに入ってジュースを買い、車の中で地図を眺めた。この先で道は二つに分かれていた。一つはわりに大きい国道で、おそらく信号も多いし、車も多いだろう。もう一つの道は山沿いを走り、これといって発達した町や観光地もなく、渋滞の心配をせずに気持ちよく走

れそうだった。僕は迷うことなく後者の道を選ぶことにした。山間部のほうがテントを張る場所を見つけやすい。最初から宿に泊まるつもりはなかった。かといって有料キャンプ場も行くつもりはなかった。ただテントを張るだけなのに何千円も取られることがあるし、それに他の旅行者もいるだろうから余計な気を使うのは嫌だった。山奥に入って、目立たないように自分だけの場所を確保するのだ。ひっそりとテントを張り、一人で自然に囲まれてのんびりした時間を過ごしたい。携帯電話や騒音に邪魔されることなく、森の中で新鮮な空気を独り占めして、酒を飲んで日常を忘れてリラックスする。そう考えると運転で疲れた体もまたリフレッシュしたような気分になった。

ＣＤを入れ替えて車を山の方に向けて走らせた。カーステレオのボリュームをまた少し大きくして、ストレートでビートの強いロックを聞いた。ローリングストーンズ、ディープパープル、レッドツェペリン、ジミ・ヘンドリックス、カルロス・サンタナ。シンプルでわかりやすい。世の中が今よりはるかにシンプルだった時代の音楽だ。やっぱり昼間のドライブにはこういった音楽に限る。ドライブ感があって、明瞭なトーンのものがいい。昼間には昼間の、夜には夜に合った音楽を聴く。

昔「心なんてお天気で変わるのさ」なんて歌があったけど、心なんて天気よりも変わりやすい。だから僕は旅行に出かける時にはさまざまなジャンルの音楽を持っていく。ロック、テクノ、ダンス、ラテン、ブルース、ジャズ、クラシック。旅行中に好きな音楽を思いっきり聞くというのも一つの楽しみであると思う。

こうして久しぶりにじっくり音楽を聞いていると、いかに自分が音楽に飢えていたかということがわかる。どれだけ聞いていてもぜんぜん飽きてこないし、間延びもしない。逆に神経がひとつひとつ解きほぐされてゆくようだ。音楽という波の振動によって、体から疲労感が剥がれ落ちてゆく気がする。

山の中に入って行くにつれ、しだいに家々の数も少なくなり、や

がてくねくねとした道が続く二車線の山道になった。信号もほとんどなく止まる事もない。何台かの車が苛々したように僕の車を追い抜いて行ったけど、僕はマイペースに車を走らせ続けた。車もようやく調子がでてきたらしく気持ちよくエンジンが回っていた。太陽はずいぶんと西に傾き、道上に陽が当たる所も少なくなってきた。念のため目に付いたコンビニに入り食料とジュースを買った。

それからもうしばらく走り、あたりが家一つなく、看板やネオンもが無くなってきたころにだんだんと空が薄暗くなってきたのがわかった。そろそろテントを張る場所を探さなくては、と思った。適当な小道を見つけてはそこに入って行き、静かそうで人目に付かない場所を探した。適当な場所が見つからずにいくつかの小道を出たり入ったりしているうちに、ますます辺りは暗くなってきて、どうしようかなと思い始めたときに公園の看板が目に付いた。僕は公園の矢印の方向に向かってひと気のない暗い道に車を進めた。

辿り着いた公園は山道から少し離れたところにあり、小さな外套とちょっとした広場、くたびれたようなベンチがあるだけの閑散とした雰囲気が漂っていた。

ひとりでゆったりとくつろぐには良い場所かもしれない。そう思って今日はここで寝ることに決めた。車をわきに停め、荷物をおろしてテントを張った。そして一息ついて煙草を吸った。ときどき昆虫が外套にあたるパチパチという乾いた音を別にすれば、辺りは不気味なほど静まり返っていた。僕は近くにあったベンチに腰を下ろし、CDウオークマンに携帯用のスピーカーを繋げ、音楽を聴きながらコンビニで買ったぱさぱさしたご飯を食べた。それでも自然の中で食べるご飯はコンビニの味気のないものといえども、とてもおいしく感じられた。食事ぐらい質素でもいい。食べ終わるともう一本煙草を吸い、今日一日過ごしたのんびりした時間を思い返して体を伸ばした。日々の緊張感が解きほぐれ、ずいぶんリラックスできたようだった。

僕はしんみりしたジャズを聴いてウイスキーをストレートで飲んだ。

文句ないな。全く文句ない。日常からの脱出。束の間の休息。自分はここにいて楽しい時間を過ごしているという開放感と安堵感。何者にも変えがたい時間である。
木々から染み出してくるようなまっさらで新鮮な空気を肺が破裂するぐらい放り込んでは吐き出し、呆れるぐらい何度も繰り返した。そして胸の奥のほうに暖かい熱のようなものをじんわりと感じることができた。ようやく自分をちょっとだけ取り戻したような気がした。
休みはまだ3日ある。焦ることはない。じっくりと楽しめばいい。最後の1日は家に帰って掃除や洗濯、仕事の準備などをするとしても、まだ2日は自由な時間が残っているのだ。時計を何度も睨みつけて慌てて出勤することもないし、どこかに電話をかけなくてはいけないことも、付け加えれた予定もない。素晴らしい日々だ。何にも予定がないということはなんて素晴らしいことだろう。自由な時間。好きなように過ごせる時間。一秒一秒がとてもいとおしく感じられる。ウイスキーを半分ぐらい飲んだところで眠くなってきた。辺りを片付け、テントにもぐりこんだ。そして森と共に深く安らかな眠りについた。

朝目覚めてみてしばらくの間戸惑った。自分がどこにいるのかよくわからなかったからだ。今ここに自分がいることが正しいことなのか、間違っているのかさえわからないでいた。いつも目覚める場所と空気が違う。なんだか眠っている間に、別の場所に運ばれてしまったような錯覚に捕らわれた。どこか遠くに連れ去られたのだという不安と、日常から切り離されて別の場所にいるのだという興奮の間を行ったり来たりした。毎日毎日忙しい日々を送っていたため、目が覚めると当たり前ように自分の部屋にいると思い込んでいるのだ。ぼんやりした意識の中で今ここにある現状を理解しようと努めた。そしてやっと自分が旅行に来たということを思い出した。それを思い出すともうしばらく横になっていたいという気になった。今

日一日の時間は真っ白で何の汚れもないまま目の前に広がっているのだ。まだ眠っていたところでそれは僕の自由な時間なのだ。
しかし思いとはうらはらにだんだんと意識はしっかりとしてきた。今日という真っ白なキャンバスに僕の思いどおりに時間を刻み込める、そう思うと勢いよくテントから抜け出して辺りの様子をうかがった。気がつかないうちに太陽はしっかりと顔を出し、辺りにいくつもの影を作っていた。ベンチに座って昨日買っておいた缶コーヒーを飲みながら煙草を吸った。昨日の夜は暗くてわからなかったけど、道はこの公園で行き止まりになっているらしく向こう側は静かな森が延々とどこまでも続いていた。時々鳥のさえずる声が聞こえ、朝独得の生まれたての新鮮な空気をみんなで分け合っているような神秘的な気分がした。この公園で一夜を過ごしたおかげか、豊かな自然の風景がある親しみを持って見守ってくれているような和やかな気分になった。
もう一本煙草を吸い、車からタオルと歯ブラシを取り出して公園に備え付けてある水道で顔を洗ってゆっくりと歯を磨いた。何にも急かされることなく迎えられる一日の始まり。こんなにゆったりとした朝を過ごすのは本当に久しぶりのことだった。
それからベンチにひっくり返ってぼんやりと空を眺めた。ベンチは木陰になっていたけど、木の隙間から太陽がちらちらと顔を覗かせていた。土の匂いが辺りに満ちていて僕を懐かしい気持ちにさせた。幸せな気分に浸りながらもう少し眠ろうかなと思って目を閉じた。しかしそれに反して太陽の光は一層強くなり、瞼をだんだんと赤色に染めていった。眩しくてぼんやりと目を開けると、しばらくの間、周りの風景に霧がかかったように白っぽくなってはっきりと見えなくなる。木や草や土、目に映るすべての世界が光を放っているように見える。僕はそんな束の間の世界に魅せられた。
木々は大地にしっかりと根を下ろして力強くそびえ立ち、草達はふんわりした風にゆられて楽しそうに踊っているように見える。鳥たちは微笑みながら自由に空を飛びまわっているよな気がする。あり

とあらゆるものが一体感にあふれ、手を伸ばせばやわらかく、温かみのある世界を身近に感じられるような、少年の頃の気持ちを微かに胸に感じることができた。僕は再び目を閉じて瞼を赤く焼き、そんな束の間の世界を味わった。それは懐かしく古い世界のようでもあり、同時に今まで感じたことのない新しい世界でもあった。そうするうちだんだんと心に淡い喪失感のようなものが紛れ込んでくるような気がしてきた。

「すべては・・・流れている」と思った。

まばたきひとつする間に、何かが生まれ、そして死んでゆく。誰にもそれを止めることはできない。僕は改めて自分の無力さを痛感し、涙が流れるのをじっとこらえながら、淋しさの中でそんな無力さを心のずっと奥のほうに押しやった。

流してしまえばいい・・・この感情がどこかに流れ着くのかはわからないけど、時に流されて僕から遠く離れて行くのをじっと見守った。

少し落ち着いてくると車から読みかけの本を取り出し、ベンチに座って続きを読み始めた。このところ忙しくて全然本を読む時間なんてなかったから、前の内容を思い出すまでにずいぶんと読み返さなくてはいけなかった。ようやくカンを取り戻したころに車の音が近づいてくるのがわかった。

車は家族が好むファミリーカーで夫婦が前に乗り、後部座席には子供が二人乗っていた。運転手の男は僕とテントと車を交互に何度か見て、不思議そうな顔をしながらユーターンして戻っていった。辺りに静寂が戻ってくるとなんとなくお腹が減ったな、と僕は思った。食料を買いにまたごちゃごちゃした人の集まる所へ行くのを考えると少しうんざりしたけど、お腹が減ったので仕方がない。テントを畳んで荷物を車に載せエンジンをかけた。

そして煙草を吸いながら周りをぐるっと見回してこの場所に感謝した。休息を与えてくれた場所。新しい世界を見せてくれた場所。僕を受け入れやさしく迎え入れてくれた場所。煙草を吸い終えると、

名残惜しさを感じながら公園を後にした。

僕は昨日と同じようにのんびりと一日を過ごした。行く当てもなくマイペースに車を走らせ音楽を聴いたり、川を眺めたり、本を読んだり、気に入った風景があれば写真を撮ったり、温泉に入ってビールを飲んだり、気ままな時を楽しんだ。日が暮れるとひと気のない場所にテントを張り、ウイスキーを飲んで眠りについた。

こんなのんびりとした生活をしていると、自分というものは自然の中の一部であり、自分は周りに存在するものと触れ合うことによって、僕の存在を認識できるという、支え合いの精神を思い出すことができる。ねじ曲がった世界の形をほんの少しだけ正常な状態に戻すことができたような気がする。

そうして3日目を迎えた。

まだ休みは2日残っていたけど、この生活もあと3日すれば終わりなのだ。そう思いたくはなかったけど、2日後のことを考えると頭が痛むような気がした。それに明日にはもう家に帰らなくてはいけない。家に帰るということは日常に戻るということを意味していた。考えるまでもなく家になんか帰りたくはない。連休明け1日、2日はうまく体がなじまないことはあったが、連休でリフレッシュした心も体もまるでそれが一瞬の夢であったかのように、疲労感でべとついた日常に飲み込まれてしまう。日常とはそれほど強い吸引力を持っているのだ。毎日毎日が同じように感じられる。

仕事をしている時にこれと全く同じことを何ヶ月か前にやったような錯覚にとらわれることがある。今日が本当に今日であるという確信がもてない。タイムスリップでもしてしまったんじゃないかという気がして、自分が本当にここにいるのだという実感が湧いてこない。どんどん自分が薄らいでいってしまいには無くなってしまうのじゃないかと思うこともある。

だからと言ってどうしていいのかもよくわからないままでいた。よくわからないまま僕は仕事を続けた。仕事をする上ではできるだけ

真面目に取り組み、やるべきことはメリハリをつけてきちんとこなして物事を考え、前向きな意見も述べたりした。僕の仕事ぶりに好意を持ってくれる人もいたし、それに応えるよう努力も惜しまなかった。日々の生活をより良いものにするためにもあれこれと試行錯誤し、いろんなものに取り組んだ。

でもどんなことをしても日常に対する無力感や虚無感を拭い去ることはできなかった。あらゆる工夫をこなし「今度こそは大丈夫」と思っていても、それは必ず僕の目の前に立ち塞がっていた。あざ笑うように僕を見下ろし、僕の無力さをじっと訴えかけるようだった。僕は暗く冷たい海の中、バケツで水をかきだしているような無意味な日常を送っていた。そして振り返ってみると全く価値のない膨大な時間だけが積み重ねられている。

なにかしらの価値を見出そうと焦ったり、あがいたりしても、ふと気がつくと虚無という世界の中心にちっぽけな自分がいるだけで何一つ変わってはいない。どこへ逃げようとも影のようにぴったりとついて来て、どんなことをしても振り払うことはできない。惰性という名の日常。

僕は学校を出て就職する際に、これといった専門的な技術や知識はなかったし、そして特に自分が望むことも、はっきりとやりたいことも無く、なんとなく今の仕事に就いた。しかし実際に仕事をしてみると、仕事というものは想像していたものとは大きくかけ離れていた。仕事がつらいとか嫌だとかいう以前に、僕の求めるひとかけらもそこには存在しないことがわかった。より正確に言えば、僕が望むものと、仕事をするうえで僕に望まれるものの間には致命的な誤差があるのだ。かといってどうすればいいのかわからなかった。僕は自分を押し殺すように心の扉をしっかりと閉め、分厚く塗り固めていった。「オズの魔法使い」に出てくる心のないブリキの人間のように仕事の間には心なんて存在しないイメージの自分を作り上げ、それを演じ続けた。ただイメージからはみ出ないように演じ続けていれば勝手に物事は勝手にしかるべき方向へと進んでいった。

他人に心を開くこともだんだんと少なくなっていったし、へたに開いていけばただ自分が傷づくだけだと思うようになってもいた。だんだんばかバカらしくなってきてその必要性すら感じなくなっていた。でも当然ながら僕は心を持っていて、心は胸の奥のほうで苦痛に喘いでいた。苦痛を和らげるため自由な時間にはちょっとだけ心の扉を開き、淀んだ空気を吐き出して、自然な風を心に注ぎ込んだ。でも眠る前にはちゃんとその扉を閉め、しっかりと鍵をかけてブリキの人間に戻った。しかし扉の隙間から風が流れ込んできて、その音がうるさくて眠れない夜も時々あった。誰も自然の流れには逆らえないのだ。

普段の忙しい生活の中では扉を開けていられる時間はごくわずかで、そのうちに扉の場所さえわからなくなってしまうかもしれない。扉がさび付いて開かなくなるかもしれない。扉の向こうに何があるのか見届けないうちに死んでしまうかもしれない。そんな恐怖感に苛立つこともあった。

車を走らせながらこんなふうに悶々としていろいろなことを考えた。自分のおかれている状況を考えてみても気分は落ち込む一方だった。考えれば考えるほど暗く混沌とした世界に引き込まれて行くようだった。先のことを考えたところで、後ろを振り返ったところで、闇の中に一滴の光もないことに気づくだけだった。無駄な疲労を生み出すだけのとりとめもない考えだけが、浮かんでは消えていった。僕は考えを振り払い、車の運転や、音楽を聴くことに集中しようと試みた。今を楽しめばそれでいいんだ。しかしそう思ったところで無駄だった。日常に対する恐怖感が背中にじりじりと忍び寄って来ているのだ。考えまい、考えまい、という思いとはうらはらに気分を悪くさせる考えは次から次へと溢れ出てきた。

「考えないでいようと思うことそれ自体、すでに考えているってことなんだよ」と昔誰かが僕に言ったのを思い出した。それで諦めてもうちょっと自分について考えてみることにした。できるだけ前向きな気持ちになれるように気を配りながら・・・。

ともかくこうして旅行をしている間は自分の心の存在を強く感じることができる。ゆったりした空気やどこまでも広がる大地、風が耳元をふわふわと通り過ぎて行く音、鳥や昆虫がたくましく生きている世界をありありと感じることができた。そして何よりも心の中に生命力が沸々と湧き上がる熱のようなものが伝わってくる。世界中に薄い膜がかかり、現実感がうまく感じられない日常とは全く別の惑星にでもいるようだった。

現実・・・

現実とは一体なんなのだろう、と思った。

朝起きて、会社に行き夜遅く帰ってくる。そして一日のことを振り返ってみる。しかしそこにはあまり現実感がない。朝起きれば世界は明るいものだと思っている。しかしそれが本当に太陽の光によるものなのか感じる暇もない。町を飛び回る鳥たちや、忙しく歩き回る人々がたとえロボットであってもおそらく気づきさえしないかもしれない。立ち並ぶビルや木々たちがハリボテで作られた空っぽのがらんどうであろうと疑問さえ抱くことはない。僕にとって大切なものが知らぬ間に消滅しているかもしれない。すり替えられているかもしれない。無感覚に陥っている自分に、自分で気づくことさえできない。そんな生活が果たして現実と呼ぶに値するものなのだろうか。

そこから抜け出そうとする僕を人々は現実逃避だと呼ぶかもしれない。でも彼らは本当に現実味があり、リアルだと感じることができる世界を過ごせているのだろうか。僕にはわからなかった。僕はもっとゆっくりした時間の中で、じっくりと世界を噛みしめたいと思う。それが僕にとって現実味のある、現実と呼べる世界であるような気がした。きっと僕本来のペースは仕事をしているときと比べるとものすごく遅いのかもしれない。あるいはただ僕が働いている時の世界のペースが速いのかもしれない。どちらにせよ結論は同じようなものだった。僕のペースは世の中に合わないのだ。でもそう

思っているのはおそらく僕ひとりだけではないだろう。結局、僕には勇気がないだけなのかもしれない。貪欲さが足りないのかも、現状を打破しようという決定的な何かを待ち望んでいるだけかも・・・

でも・・・・ここらへんでいつも考えは壁にぶち当たる。だからといってどうすればいいんだ・・・わからない・・・

「わからない」というのがいつも導き出す答えである。それ以上にも、それ以下にもならない。いくら考えてみたところで、現時点の僕にわからないものはわからないままであり、満足はいかないけど、これ以上考えたところで話しは前にも後ろにも進まない。

この日はふさぎこんだ気分を反映するかのように分厚い雲が空に広がり、太陽の居場所を確かめることもできず、今にも雨が降り出しそうで、僕を悲しみのどん底に突き落とそうと機会をうかがっているかのようだった。世界の終わりとはきっとこんな天気なんだという気がした。いったい今が何時ごろなのか空を見上げても検討もつかない。時計に目をやるとととっくに昼を廻っていた。僕はずいぶんと長いこと考え事をしていたせいで、昼飯を食うことすら忘れていたらしい。

考えすぎ、ご飯を食べない――健康に良くない。これもまたひとつの悪循環だ。

あまりお腹は空いていないように感じられたけど、とりあえずご飯を食べてみようと重い、市街地まで車を走らせていつもは行かないようなちょっとだけ高級そうな飲食店でご飯を食べることにした。ちゃんとした時間感覚の中で、ちゃんとした味のする、ちゃんとしたご飯を食べる。ご飯を食べて煙草を吸い終える頃には、気分もいくらかましになっていることを祈った。連休中ではあったけど時間帯がずれていたので店は思ったより混んでいなかった。注文をして料理を待つ間、地図を見て現在地を確かめた。なんだかんだ言ったところで、そろそろ家に帰る支度をしなくてはいけない。地図を調べながら今日の残りの時間と明日のことを考えた。明日は家に帰る

としても、長いこと運転して疲れたくはないし、渋滞のことを考えてもそんなに家から離れていないほうがいい。僕は初日に泊まった公園のことを思い出した。あそこなら静かでのんびりできるし、余裕を持って家に帰ることができる。それにあの公園はけっこう気に入っていた。あんな小さな公園は地図には載ってなくて正確な場所はわからなかったけど、暗くなるころまでには着くことができそうだった。

そう決めたころに料理が出てきた。僕はご飯をできるだけゆっくりと一口一口を味わって食べ、食後の一服も燃え上がる煙を眺めながら慈しむようにして煙草を吸った。少しは気持ちも切り替えられたような気がした。そして町で買い物をしてからあの公園へ向かって車を走らせた。

辺りが真っ暗になる少し前に公園に着いた。相変わらずしんと静まり返っていて、他の人が立ち寄った形跡もなかった。唯一僕だけが静寂を切り裂くことを許されているような親密な空気が辺りにはまだ残っていた。一昨日と同じ場所に車を停め、同じ場所にテントを張ると何かの儀式が始められるような気分になった。僕はいつものように音楽を聴き、ウイスキーを飲んだ。しかし一昨日とは違って、開放的な気分はやってこなかった。代わりにいくつかため息がこぼれた。僕の心の４分の３は既に日常に犯され始めていた。僕を受け入れてくれた、僕にとっての聖域のようなこの公園ではあったが、それに共鳴するにはもはや心の自由を欠いていた。心を流れに委ね、鳥と共に空を飛びまわったり、風と共に森を駈けずり回ったり、大地と共に熱を感じたりすることはもうできなかった。死刑台に上がる前の、死刑囚のような気分になった。いや、生きている感覚をだんだんと抜き取られるという状況の僕よりは、死刑囚のほうがまだ人間味を持っているかもしれない。自然な心が汚された部分を洗い流すかのように僕はウイスキーを飲んだ。それ以外にはこれといってすることも思い浮かばなかった。

もあっとした熱気が立ち込めるテントの中で翌朝目を覚ました。昨晩はウイスキーを一本空けたようだ。さらにいつ眠ったのかもよく覚えていない。当然気分は最悪だった。ふわふわとまだどこかを彷徨っているような頭を抱えて、テントの外に出た。天気は悪くない。でもそれだけだった。それ以上感じ取れるものは何もなかった。公園との親密さも消えてしまい、あれほど生命力に満ちていた世界中の鳥や木々たちもずっと遠くに行ってしまったようだった。互いに遠慮しあっているような他人行儀な雰囲気に変わってしまっていた。試しに煙草を吸ってみたが、昨日までとは全く種類の違う煙草のような気がした。世界の果てに一人ぼっちで置き去りにされたような激しい孤独感に包まれた。こうなったのは疑う余地もなく僕の責任だった。僕が心を開いていることができれば、ここにはすがすがしい朝が待っていてくれたに違いない。この世界を日常に染め上げたのはまぎれもないこの僕自身なのだ。でもやはりどうしていいのかよくわからなかった。無力感と喪失感が僕の両脇にぴったりと身を寄せていた。

流れていったのだ・・・と僕は思った。

すべては流れ、潤滑しているのに僕だけが流れに乗れず、たまりのように一箇所に留まったまま流れを阻害していた。このままではいけない。

わらにすがるような気持ちでなんとなく辺りを散歩してみることにした。そして公園の奥の森に向かってなんとなく歩き始めた。森の中は大きな木が立ち並び、見渡すかぎりの陰の世界を作り出していた。陰は光を奪い取り、沈黙は汗となって僕の体にまとわりついた。落ち葉を踏みにじり、草木を振り払ってどんどんと奥へと入っていった。何か目的があったわけではない。もしそんなものがあれば僕はもう少し救われたに違いない。ただ何かを取り戻したかっただけだった。熱のあるもの、生命力を感じるもの、暗黒の世界から僕を引きずり出してくれるもの。ゾンビが生き血を求めて目の焦点

の定まらないままさ迷い歩くようによたよたと歩き続けた。疲れや喉の渇きさえ感じなかった。どれくらい歩いただろうか。1時間、2時間。もしかするともっと歩いていたかもしれない。でもそんなことはもうどうでもよくなっていた。

やがて少し開けた場所に出た。森の一部分を円形にくりぬいたように光が降り注いでいる小さな広場のような場所だった。そして円形の広場の中心には太陽の光線をはね返すようにしてきらきらと光輝く沼があった。その風景は長い年月をかけ自然が作り上げたな神秘的な楽園のように見えた。僕は引き寄せられるように沼の淵まで行き、腰を下ろした。光の輪のなかで僕が一点の闇の濁りであるような気がした。体は確かに疲れてはいたけど、その疲れも脳にはうまく伝わっていないようだった。

しばらくの間ただじっと目の前の沼を見るともなくぼんやりと眺めていた。沼の大きさは人が2，3人ほど入れるくらいで、土がやわらかくなっただけというような泥沼だった。ずいぶんと昔からあるのかもしれないし、もしかすると底なし沼かもしれなかった。沼からは脂肪を焼いたときみたいに、欲望が煙と共に舞い上がるような嫌な悪臭を放ち、それが鼻を刺激して甘酸っぱいものが胸に込み上げてきた。しかし奇妙なくらいそこから動く気がしなくて、長い間沼と向き合っていた。

どのくらい眺めていただろうか。急に僕の心を激しく揺さぶり、熱をじわじわと目覚めさせるような感覚に包まれた。よく見ると沼の中心がわずかに揺れ動いているのがわかった。水が湧き出ているのだ。沼が固まって土になってしまうのを防ごうと、必死に抵抗するかのごとくじっとりと水が染み出ていた。その部分を眺めているとだんだんと僕の中の何かが溶けて崩れてゆくようだった。何十年にも渡って蓄積し、こびりついた何かがゆっくりと剥がれ落ちてゆくのがわかった。溶けてしまったどろどろとしたものが僕の体を伝い、生暖かい風がそのどろどろを吹き飛ばしていった。僕はその流れに身をゆだね、受け入れていった。その流れのなかで僕は初めて心と

いうものは自然なものであることを知った。何ものにも属せずただここにあるだけのものだということを。無限に広がり、どこにも行き着くことはない。この沼の奥底にある透明な水のように僕の心はどこまでも澄んで、美しく輝いていた。僕は自分の心が求めるものを手にとるように感じることができた。体の隅々から生命力あふれ出て、生きている喜びに涙が頬を伝った。
そしていつまでも沼の淵にたたずんでいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0225i/

沼

2010年11月9日05時30分発行